

第24回（1992年度）サントリー音楽賞  
受賞者は練木繁夫氏に決定

毎年わが国の洋楽の発展にもっとも顕著な業績をあげた日本人に贈る「サントリー音楽賞」の第24回（1992年度）受賞者は、練木繁夫氏に決定した。

1. 1993年1月15日（成人の日）午前10時より東京丸の内の東京會館において、選考委員13名の出席により第一次選考を行い、「候補者」を選定した。
2. 引き続き3月1日（月）午前10時より、東京紀尾井町のザ・フォーラムにおいて選考委員11名の出席（礒山、小石両委員は書面参加）により最終選考会を開催、慎重な審議の結果、第24回（1992年度）サントリー音楽賞受賞者に練木繁夫氏が選定された。そして、同日午後開催の理事会において正式に決定された。
3. 練木繁夫氏の選考理由は別紙のとおり。
4. 選考委員は下記の13氏。  
礒山 雅・岩井宏之・小石忠男・菅野浩和・武田明倫・中河原理・丹羽正明・  
藤田由之・船山 隆・松本勝男・諸井 誠・門馬直美・吉田雅夫

（50音順）

練木繁夫氏（ピアノ）

<贈賞理由>

インディアナ大学教授としてアメリカ合衆国に本拠をおきながら、毎年数回にわたって日本に帰国して国内での演奏活動を続けている練木繁夫は、卓越した技量の持ち主であることは言うに及ばず、音楽家として一層の成熟を見せ、近年ますます目覚ましい活躍を示している。彼は、世界的チェリスト、ヤーノシュ・シュタルケルのパートナーとして顕著な業績をあげてきたばかりでなく、独奏者としても非凡な存在を強く印象づけてきた。今や、四十歳台に達した練木は、日本の演奏家の中でも、第一級にランクされるべきピアニストであることは間違いない。ここ十年ほど、練木繁夫は、毎年、国内の各オーケストラから

定期演奏会などにおける協奏曲の独奏者として迎えられ、その演奏はいずれも高い評価を得ているが、また一方、室内楽の分野においても、極めて優れた成果を示し、わが国の室内楽の質的向上に果たしている役割は極めて大きい。

1992年の主な活動には次のようなものがある。

オーケストラとの共演では、読売日響定期演奏会（プロコフィエフの第2番、1／21）、大阪センチュリー響定期（プロコフィエフの第3番、5／9）、都響（ベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番、6／30）、「二十世紀の音楽」“管弦楽Ⅰ”における東響との協演（ガーシュウインの〈へ調のコンチェルト〉、8／24）、読売日響との国内演奏旅行（ベートーヴェンの〈皇帝〉、10月）など。

室内楽では、「向山佳絵子／チェロの世界」（6／18）、「東京ソロイスツ」としての室内楽演奏会（6月中に4回）、「霧島音楽祭」における影山誠治・堤剛その他とのアンサンブル（チャイコフスキーの「ピアノ三重奏曲」など、7～8月）、さらに「クリーヴランド弦楽四重奏団」とのドヴォルジャークの「ピアノ五重奏曲」（全国で3回）など、いずれも見事な演奏によって聴衆に深い感銘を与えた。

#### <略歴>

1951年東京生まれ。桐朋学園子供のための音楽教室でピアノ、作曲、フルートを学ぶ。桐朋学園女子高等学校音楽科で大島正泰に師事。1969年アメリカ、インディアナ大学入学、G・シェベックに師事。74年チャイコフスキー国際コンクール最優秀伴奏賞、76年ツーソン（アリゾナ）ピアノコンクール第1位、79年インターナショナル・スリーリバーズ・ピアノ・コンクール第1位。

現在、母校のインディアナ大学で、ピアノ科教授として後進の指導に携わるかたわら、独奏者として、ボストン、シカゴ、ピッツバーグ、ナショナル交響楽団等との共演、リサイタル、また室内楽奏者としても日本国内及び欧米で幅広い演奏活動を続けている。

1976年より、チェコの巨匠ヤーノシュ・シュタルケルのパートナーとして世界各地で共演。1978年、82年の日本公演でも好評を博す。83年以降、毎年一時帰国し、NHK交響楽団、読売日本交響楽団等、日本国内の各オーケストラと共演を重ねている。

以 上

